

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業
・国際交流拠点形成事業)

事業名： 様々な人に開かれた美術館を目指して

事業者名： 横浜美術館

住所：神奈川県横浜市西区みなとみらい3-4-1

TEL：045-221-0300

FAX：045-221-0317

HPアドレス：<http://www.yaf.or.jp/yma/>



連携事業者名：女子美術大学美術館、神奈川県ライトセンタ
ー、横浜市民ギャラリーあざみ野

会場：横浜美術館

事業期間：平成22年6月1日 ～ 平成23年3月15日

1. 館の使命と本事業の関係

美術を通して新しい価値観を見だし、豊かな社会を創出する。

美術による新しい価値の創造を目指して、市民ともに成長する美術館。

文化芸術都市・横浜の実現

本来の機能である、学芸員の調査、研究に基づく美術作品の、収集、展示、普及活動を充実させ、多くの人にコレクション展の楽しみを広げる。

2. 企画内容

①事業目的

美術館にアクセスするのに多くの困難が介在する利用者、あるいは潜在的な利用者の美術館へのアクセスをしやすいこと、また、訪れた人誰もが喜びを発見することのできる美術館を目指さずプロジェクト。今年度は、視覚に障がいのある人を中心に進めるが、今後継続的に様々な人がアクセスしやすい美術館を目指して展開していく。さらに、様々な人が共に集い語ることによって、美術の創造性を広げていくことを目指す。

②事業概要

他団体、専門家等の協力を得て、市民参加のワークショップを行い、視覚に障がいのある人の美術鑑賞についての課題を抽出しする。検討会を開催し整理、検討し鑑賞プランを作成する。作成した鑑賞プランによる鑑賞会を実施し、参加者から危険を集め再検討する。再検討に基づくプランによる鑑賞会を実施し、さらに参加者から意見を聴取し整理、検討し次年度以降につなげる。車椅子の利用者の美術館での鑑賞について考えるワークショップを行う。一連の成果を報告書にまとめる。

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

2010 年

6月14日(月)第1回検討会 ワールショップについて、年間スケジュール確認など

7月31日(土)ワークショップ グループワークによる気づきの抽出・アイディア発表

参加者 58 名(視覚障がい者、一般参加者、学生、協力者、美術館職員、記録、見学者)

8月22日(日)第2回検討会 気づきの整理・重要課題の抽出・アイデア展開など

9月3日(金)第3回検討会 プラン(プログラム・ツール)の検討・「言葉の地図」(アクセス調査)

9月14日(火)第4回検討会 「館内地図」など試作検討・「触図」などの検討

10月6日(水)第5回検討会 「展示室図」など試作の検証・「鑑賞のヒント」などの試作検討・鑑賞会準備

10月10日(日)第1回鑑賞会 試作ツールを使いグループ鑑賞・対面アンケート

参加者 39 名(視覚障がい者、一般参加者、学生、協力者、美術館職員、記録)

【検証した試作】「館内地図」(拡大図・触図・点図)「展示室図」「おすすめ鑑賞コース」「鑑賞のヒント」「作品解説・解釈」「読みやすいキャプション」「階段のコントラスト」

10月11日(月・祝)第6回検討会 アンケート分析・「手がかり」(触る・身体性)、音声化・冊子化などの検討

11月3日(水・祝)第7回検討会「鑑賞ガイド」の試作検討・「館内立体模型」の検討など

11月21日(日)第8回検討会「鑑賞ガイド」の試作検討・鑑賞会についてなど

11月26日(金)第9回検討会「鑑賞ガイド」の試作検討「手がかり」(言葉・触る)検討など

12月7日(火)第10回検討会 課題マップ作成・「鑑賞ガイド」の検証・報告書について

12月21日(火)第11回検討会 報告書について

1月14日(金)第12回検討会「鑑賞ガイド」の最終調整

1月22日(土)第2回鑑賞会「鑑賞ガイド」の試作を使いグループ鑑賞・対面アンケート・参加者座談会

参加者 64 名(視覚障がい者、一般参加者、学生、協力者、美術館職員、記録、見学者)

【検証した試作】「鑑賞ガイド」「手でみる館内地図」「よみやすいキャプション」

1月23日(日)第13回検討会アンケート分析、試作改善案検討・取り組みの振り返り座談会

3月6日(日)ワークショップ「車椅子利用者と一緒に鑑賞を考える」

グループワークによる気づきの抽出、アイディア発表「鑑賞ガイド」の検証

参加者 31 名(車椅子利用者、一般参加者、学生、協力者、美術館職員、記録、見学)



(2) 参加者の数

参加者人数 延べ 304 人

(3) 事業により作成した印刷物等

「鑑賞会チラシ」 「鑑賞キット」 「ヨココレ楽しむ鑑賞ガイド」

(4) 実施事業に関する新聞記事等

○新聞

神奈川新聞 2010 年 8 月 12 日(木)



「アート鑑賞からバリアーなくせ 横浜美術館が事業開始」 神奈川新聞 2010. 8. 12

横浜美術館（横浜市西区）で、障がいのある人をはじめ、より多くの人たちに美術館を楽しんでもらうための事業「様々な人に開かれた美術館を目指して」が、スタートした。

本年度は視覚障がい者のためのプログラム作りがテーマで、文化庁の美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業として行われる。7月31日には、「見えない人」と「見える人」が一緒に展覧会を周り、課題などを考えるワークショップも開かれた。

ワークショップには、県ライトセンター（同市旭区）から紹介された30代から70代までの視覚障がい者6人と、10代から70代までの市民36名が参加。6グループに分かれ、同美術館の収蔵品を展示した「コレクション展」を鑑賞した。視力の全くない人、作品の説明文は読める人など、参加者の障がいの程度はさまざま。「見える人」が絵画のモチーフや色を説明したり、彫刻の質感を表現しながら楽しそうに作品を見て回った。鑑賞後は、グループごとに「作品説明が読みにくい」

「照明の反射でケース内の作品がよく見えない」など、気づいた点を発表。さらにデジタル機器の活用、触れて鑑賞できる彫刻のレプリカ作製などが提案された。「美術鑑賞から比較的遠い存在である視覚障がい者を対象に始めることで、何かわかることがあるのではないか。」この事業を担当する同美術館の関淳一さんは、こう説明する。視覚障がい者のニーズを考えることは、同時に、高齢者や日本語をあまり理解していない人などに対する“気づき”にもつながるのではないかと考えているという。ワークショップに参加した視覚障がい者からは「美術には縁が遠かったが、とても楽しく誘導してもらった」など、好意的な感想が多かった。また、一般参加者からは「視覚障がい者と対話することで、作品を『見る』のではなく『味わう』ことができた」という発見の声もあった。関さんは「個人の経験や考え方によって、求めることはそれぞれ異なる。複合的な観点から考えていかなければならないと気づかされた」と話す。同美術館では、今回の結果を活用した視覚障がい者向けの鑑賞会を10月に実施。本年度末までにこの事業の報告書を作成する予定だ。

○テレビ、関連誌等

なし

4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

すべての人に開かれるべき公的機関の美術館が、実際に開かれたかたちで機能しているかということは、今、美術館にとって再確認すべき重要な課題であるといえます。

今年度、多くの視覚に障がいのある方が、ワークショップや鑑賞会に参加されました。かつて見えていた頃に楽しんだ美術鑑賞を再び楽しみたい。また、先天性の全盲の方は、美術とはどんなもののなのか知りたい、そして感動を味わいたい。弱視の方は、見ることでできるところは自分の目で

見たい、そしてサポートして欲しいなど。そこでまず感じたことは、多くの視覚に障がいのある人が、美術へそして美術館へ熱い想いをよせていたということです。

今回の参加者から、こんな声が聞かれました。「日頃思っていて今日も思ったのは、美術館に自分が好きな時にぶらっと来られたらいいなということです。見えない人のための鑑賞会だけではなく、いつでも好きな時に来られるというのがベストだと思います。今日もとてもよく説明してもらえたので、わがままかも知れませんが、いつ来ても鑑賞が楽しめるのが理想です。」

「僕もそれはわかります。一人で行くと『大丈夫ですか』といわれます。相手のお気持ちはわかりますが、要するに『危ないやつだ』ということですよ。いわれなかったことは1回もないです。」

「断るに断りきれないということもありますよね。『入っちゃ困ります』とも言えないし。だから『大丈夫ですか』という。色々事情があるのだろうなと感じる時もあります。」

「歓迎されていないニュアンスを感じる時もありますよね。まあ気持ちはわかりますけどね。」

またこんな声もありました。「私は、コミュニケーションをしながら鑑賞することで作品をイメージすることができますし、一緒に来た方も自分の見方と違うものを見ることができて、・・・一緒に見て色々なことを話し合っていくと、お互いにイメージを豊かに描くことができ、それがとてもスリリングでした。対話による鑑賞の魅力だと思います、」

障がいに対してのサポートは大切です。しかし、それはあたりまえのとであり、多くの人が社会の中で、社会の一員として普通に暮らすことを望んでいます。障がいや様々な要因で困難を抱えた人にとってのバリアをできるだけ取り払い、また相互に補い合いながら様々な人が共存する社会には、豊かな創造性が生まれ、感性が豊かに広がっていくのではないかと考えます。

今年度取り組みを通して、様々な人が体験を共有することにより美術館に創造性が生まれ、様々な人が共に鑑賞することにより、鑑賞が深まっていくという実感を得ることができました。

【活動の成果】

1. 視覚に障がいのある人と晴眼者が一緒に美術鑑賞をすることにより、両者が共に鑑賞に質を高め合う「互恵の関係」を築くことができる。
2. 美術館を視覚に障がいのある人が来館しやすくすることにより、他の来館者にとっても開かれた場にしていけることができる。
3. 視覚に障がいのある人の美術鑑賞について考えていくことは、「見るとは何か」「鑑賞とは何か」という美術館にとって本質的な問題につながる。
4. 様々な人から直接意見を聞くことによって多くのことが分かる。

【今後の目標と課題】

1. 視覚に障がいのある人の、日常生活、社会のサポート体制について調査を行い、美術館へ来やすい環境づくりについて考える。
2. 今年度は、市の社会福祉協議会、各区の健康福祉保健センター、横浜市視覚障害者福祉協会、神奈川県ライトセンターを通して情報提供（広報）を行ったが、上記の組織に所属しない人も含め今後、視覚に障がいのある人への情報の提供の仕方について考えていく必要がある。
3. 視覚に障がいのある人が美術館にいつ来てもコレクションの鑑賞を楽しむことができる環境をレギュラーサービスとして提供する。
4. 視覚に障がいのある人、この問題に関心のある人の声に、直接耳を傾ける。
5. 能動的な作品鑑賞へ導く仕組みをつくる。
6. 美術館本来の使命である収蔵品の展示の意義を一般に広め、様々な人に横浜美術館のコレクションに親しんでもらう。
7. 様々な人に開かれた美術館を目指した取り組みを、一つずつ丁寧に取り組み一步一步継続的に取り組んでいく。